

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 17 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520705

研究課題名(和文) 現役教員研修プログラムへの示唆：高校英語教師の学び

研究課題名(英文) High school EFL teachers' learning to teach

研究代表者

栗原 ゆか (Kurihara, Yuka)

東海大学・清水教養教育センター・准教授

研究者番号：50514981

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円、(間接経費) 660,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、文科省・都道府県などを中心に行われている現役英語教員のための海外研修を例に、研修後参加教員が学んだ専門知識(理論やスキル)を各自の学校現場の状況に合わせながら、実際にどのように活用しているのかについて調べた。米国研修に参加した2名の高校英語教員の授業参観とインタビューを行い、授業関連資料も収集した。教員は、研修で学んだ知識を専有する際、様々な活動場所(例えば、過去に受けた国内研修、進行中の勉強会、過去の教員・学習者としての経験、そして学校環境)を媒介とし、学校文化・学生、海外研修、そして本人の英語教育に関する信条に折り合いをつけながら学んでいることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This study reports how high school level English teachers, who participated in overseas teacher education programs and returned to their teaching sites, appropriate what they learned in the programs into their own teaching practices. The main participants of the study were two EFL teachers. The qualitative data were collected through classroom observations, interviews, and other teaching related materials. The findings suggest that the two participants appropriated the pedagogical knowledge by making use of a variety of social settings, including their past teacher training programs, ongoing study meetings, school cultures, and their own beliefs about EFL education.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：教師教育 海外研修 英語教育 文化・社会的発達理論 ヴィゴツキー

### 1. 研究開始当初の背景

近年社会科学系分野において、ヴィゴツキー、L. S. の「文化的・社会的発達理論」(柴田・宮坂, 2005)を理論的枠組みとした研究が盛んに行われている。「文化的・社会的発達理論」とは、人間の学びは、社会的なものから個へ発達すると考え、文化・社会・歴史的に形成されてきた道具、例えばことばを媒介に行われている、としている(e.g., John-Steiner & Mahn, 1996; Vygotsky, 1978)。日本国内でも、この理論を応用した研究が英語教育の分野で議論され始めている。しかし、こうした研究は現在学習者に焦点を置いたものが多く、英語教員の学びに関する研究はまだ少ない。また、現状の教師研究は、アンケート等を研究メソッドとする短期間でデータ収集を行う研究は存在するが、長期的に教師の学びを探究している研究は極めて少ない。

国内の中等教育では、英語教育の改革が実施されており、現役英語教員研修が盛んに議論されている(久村, 2010; 松畑, 2003)。従って、英語教員の学びを長期的に探究することができる「文化的・社会的発達理論」を枠組みとした研究は、教員研修のさらなる発展に急務と言えるであろう。

これまでに栗原は、米国で行われた6・12ヶ月の日本人英語教員を対象とした海外研修(MEXT)プログラムを例に、研修後の教員の学びの過程を日本の学校現場にて調査してきた。具体的には、米国の2つのMEXT研修プログラムに参加した教員66名にアンケートを実施し、研修後日本の現場で特に活用していると考えられる理論やスキル、また知識を使用する際の困難点についても調査した。さらに、66名のアンケート参加者の内、様々なティーチングアプローチを試みていた3名の教員の授業観察・インタビューを実施した。この質的研究では、研修参加教員がプログラムで学んだ理論やスキルを、実際にどのように自分のものとして利用しているか、という専有(appropriation)過程について調べた(e.g., Kurihara, 2007, 2013a)。

本研究では、さらにその後の専有過程に焦点を置いた。上記米国海外研修プログラムで学んだ専門知識を、日本の学校現場で円滑に活用していると考えられる高等学校英語教員2名に協力を仰ぎ、研修内容の専有プロセスについて質的研究から明かにしていった(Kurihara, 2013b, 2014a)。

### 2. 研究の目的

近年文部科学省や都道府県等を中心に、現役英語教員研修が国内・外で盛んに実施されている。しかし、研修後、教員はプログラムで学んだ知識(理論やスキル)を、各学校現場に適応させながら実際にどのように活用し

ているのか、という研究は少ない。特に、こうした教師の学びを長期にわたり調べている研究は極めて少ない。従って本研究は、次の2点を目標に行った。

- (1) 高校英語教員の米国研修後の授業を日本の学校現場にて調査し、研修で学んだ知識の専有過程を明らかにする。そしてその結果より「英語教師の学び」の過程を明らかにする。
- (2) 本研究で得られた結果を、国内の研究会また国際学会において発表し、中等教育に勤務する英語教員、そして大学等で英語教員の研修プログラムに携わる英語教育関係者を対象に、分野に貢献することを目的とする。

### 3. 研究の方法

本研究は、質的ケーススタディーにて英語教員の学びの過程を検証する。主な参加者は、米国で行われたMEXTプログラムに参加し、現在高等学校に勤務する英語教員2名である。2名の勤務する学校にて、それぞれ授業参観とインタビューを実施した。さらに、授業関連資料(例えば、補助教材、レッスンプラン、参加教員自身が行った学生へのアンケート、学生のライティング活動の記録)の分析も行った。

質的研究の信頼性(Lincoln & Guba, 1985)を高めるため、授業参観、インタビュー、資料という多様なメソッドによるデータ収集のみならず、各教員の活動場所に関わる関係者(校長・副校長)からの視点もインタビューより検証した。

以下実際に実施した各教員の研究方法を示す。教員Aの授業参観は、研究授業を含め計9時間行った。授業後のインタビューは計4回であった。上記授業参観の内、1時間は研究授業であり、授業後、県内・外から参加した英語教員や県指導主事との研究会にも参加することができた。本研究の最終年度には最終インタビューを1回実施した。また、教員Bの授業参観は計3時間行った。授業後のインタビューは計3回であった。教員Aと同様、研究最終年度には最終インタビューを1回行った。また、両研究参加教員が勤務する学校責任者へのインタビューも研究当初に各学校で1回ずつ実施した。以上の内容を2011年11月から2014年3月の期間で実施した。

質的データの分析は、Johnson, Thompson, Smagorinsky, & Fry (2003)によるコーディングシステムを利用した。この研究は、ヴィゴツキーの「文化的・社会的発達理論」を理論的枠組みとして、米国の国語教員の学びの過程を調査している。

### 4. 研究成果

本研究の結果より以下の点が明らかになっている。

(1) 高等学校に勤務する英語教員の学びは、様々な活動場面が複合的に関与していることが分かった。主な活動場所としては、例えば大学の養成コースで行われた教育実習、(外国語)学習者としての経験、過去の学校現場における教員としての経験、勤務する学校文化(教育目標、生徒)、国内・外で実施された教員研修プログラム、国内の勉強会、英語教育分野に関する教員個々の信念などである。こうした様々な活動場所が、研修で学んだ知識の専有過程に複雑に関与している。そのため、それぞれの活動場所の目的や最優先事項が重なり合う場合は、教員の専有過程はわりあいスムーズに進む傾向にあった。しかし、それぞれの活動場所の目標や優先事項が反発しあう場合、教員は困難を抱える傾向にあった。これらの結果は、Grossman, Smagorinsky & Valencia (1999)と同様である。日本人英語教員が抱えた困難は、例えば日本の学校現場と海外研修の優先事項の違いなどが原因であった。

しかし、参加教員は本人が利用可能な教育的道具(例えば、クラスでの知識の試し、国内で行われる勉強会、他学校でのティーチング機会等)を媒介に、各自の学校文化や本人の教育信条、そして米国の研修で学んだ知識に折り合いをつけながら授業を進めていた。その折り合いをつけようとする過程において、教員は米国で学んだ知識を日本の現場に応用した「新たなティーチングアプローチ」を見出していることが分かった。

(2) 上記の成果を、国際学会において口頭発表した。2013年3月には米国で行われたTESOL学会、そして2014年には同じく米国で行われたAAAL学会に参加した。AAALにおいては、特に2005年より研究を継続している教員Aの専有過程について、当初の頃とと最近の違いを比較し発表した。

具体的には、2005-2006年にかけては、教員Aは米国研修で学んだ「理論やスキルを日本の学校現場において試してみる」期間を強調していた。しかし、本研究を実施した2011-2013年度にかけては「学生の目線に立った授業決定」を特に試みていた。そのため、ティーチングスキルにおいては、以前よりも本研究期間のほうが多種にわたっていた。しかし注目すべきことのひとつとして、2005-2006年においてもまた2011-2013年度の期間においても、教員Aが授業で使用した主な理論的枠組みは変わらなかった。すなわち、授業内容や授業方法の決定時に使われていた理論は、2005-2006年においても2011-2013年度においても、ほぼ同様であった。教員Aが利用している主な理論の一つは米国の研修時に特に理解を深めたヴィゴツ

キーの文化・社会的発達理論や4技能の連携等であった。

本研究は2005年から行っている継続研究であった。高校英語教員の海外研修後の専有過程に関する情報はKurihara(2007, 2012, 2013a)に掲載されている。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計3件)

Yuka Kurihara, EFL Teachers' Learning: Transitional Experiences from an Overseas Teacher Education Program to Japanese School Settings, *JALT Journal* Vol.35, No.1, 2013a, pp.51-72 (査読あり)

Yuka Kurihara, Exploring Japanese EFL Teachers' Post-Training Experiences, *JACET* 言語教師認知研究会研究収録 (*Language Teacher Cognition Research Bulletin* 2012), 2012, pp.49-59 (査読あり)

Yuka Kurihara, Appropriating conceptual and practical tools: A case study of secondary school Japanese English teachers, *JACET* 言語教師認知研究会研究収録 2011 資料編 4 Teachers' Conceptions of Research (slides) (*Language Teacher Cognition Research Bulletin* 2011), 2011, p.1-5

[学会発表](計3件)

Yuka Kurihara, A Longitudinal Study of EFL Professionals' Learning to Teach, The American Association for Applied Linguistics, 平成26年3月22日 (2014a), ポートランド、米国

Yuka Kurihara, EFL Teachers' Appropriation of Pedagogical Tools, TESOL 2013 (Teachers of English to Speakers of Other Languages 2013 International Convention and English Language Expo), 平成25年3月22日 (2013b), ダラス、米国

栗原ゆか 現役英語教師の学びの過程：今後の教師研究について、JACET 言語教師認知研究会・第7回研究発表会、平成24年11月26日、東京

[図書](計1件)

栗原ゆか 「英語教員の学びの過程が教員研修に示唆する点」『言語教師の認知の動向 (Trends in Language Teacher

Cognition) 』、笹島茂・西野孝子・江原美  
明・長嶺寿宣( 編著 )、pp.137-149、2014b、  
開拓社、東京

## 6 . 研究組織

研究代表者

栗原ゆか ( KURIHARA Yuka )

東海大学・清水教養教育センター・准教授

研究者番号 : 50514981